



インタビュー ビジネスチャンスがいっぱい

政治は安定しているのか、経済の見通しは、注目すべき企業の動きは。
最新の中南米情勢について聞いた。

日本貿易振興機構(ジェトロ)

調査部主幹 大久保 敦さん

コロナ禍での政権交代

—— コロナ禍に見舞われた約3年の間に左派政権が増えました。

ブラジルのほか、ペルー、チリ、コロンビア、ホンジュラスですね。メキシコ、アルゼンチン、ニカラグアはコロナ禍の前から左派政権でした。ベネズエラとボリビアでは左派政権がずっと続いています。一方で、ウルグアイやコスタリカなど、左派から右派に代わった国もあります。どの国の政権交代も結局、コロナ禍で格差が浮き彫りになり、当時の政権への批判が噴出したことが要因との見方があります。

左派といっても外国からの直接投資は歓迎しています。また、その多くが中道勢力との連立による中道左派政権です。民営化にブレーキがかかる、資源ナショナリズムが台頭するリスクがあるとの指摘がある一方で、格差解消に向け所得再分配が重視される側面もあり、ビジネスにとっては必ずしも逆風ではありません。

—— 一部の国を除くと民主主義は健全に機能しているように見えますが、国内の分断などは？

昨年10月に行われたブラジル大統領選では、ルーラ氏が大統領に返り咲きました。ところがルーラ氏が大統領就任後に、敗れたボルソナーロ前大統領の支持者らが国会議事堂や裁判所を占拠する事件が今年1月に起こりました。占拠はすぐに沈静化しましたが、ブラジルでは暴力的デモは非常に珍しいので驚きました。

コロナ禍前にはチリで暴動がありました。チリでは特に、富裕層が財閥を形成して富を独占してきた歴史があります。暴動は地下鉄の運賃値上げがきっかけでした。中南米の国々は多かれ少なかれ格差社会が依然として存在します。ただ、一方で大半の国々は民主主義が機能しており、国内の分断は深刻化しているわけではありません。

メキシコへの生産移転が加速

—— 次に経済です。ブラジルとメキシコを合計すると中南米域内GDPの約6割。この2カ国を中心に、最近の状況について教えてください。

食料やエネルギー資源などが豊富な南米地域は、世界のコモディティ価格が長期上昇トレンドに入れば、有望であることは間違いありません。ただ、短期的にはブラジルにとって今年は我慢の年になるかもしれません。ブラジル経済を牽引する2本の柱の1つは2億人の消費意欲旺盛な内需。そしてもう1つは資源・食料を中心とした外需で、これを牽引してきたのは中国です。2022年はロシアによるウクライナ侵攻で、石油や天然ガスの価格が急騰し、産油国ブラジルは一時的に恩恵を受けました。

一方で、ブラジルも例にもれず内需がコロナの反動で上向き、一時は供給が追い付かないほどの状態になりました。しかし同時に2021年からインフレが進行し始め、他の国々と同様にインフレ抑制のため段階的に利上げを行わざる